

金時習の自画像研究 —詩と画を中心に—

漢陽大学大学院国語国文学科博士課程

ソ・ミファ

金時習(ギム・シスプ, 1435-1493)は、朝鮮前期を代表する文人であり学者である。3歳の時に外祖父から文字を習い始めた。5歳の時に、彼は神童と噂された。当時の国王である世宗が宮廷に彼を呼び、その才能を称賛したという話が伝わっている。才能に関する幼年期の逸話は、この他にも多数ある。彼は文字を上手に操る方面で特別な能力を示した。

しかし、幼年期の天才性と周辺のはめ言葉が、彼の人生に肯定的な影響を及ぼしたとは言えない。金時習は15歳の時、母親を亡くし、父はすぐ続弦した。これによって個人的な傷を負った。自分は18歳で結婚したが、結婚生活は順風満帆ではなかった。

当時の朝鮮は癸酉靖難^{ゲ ユ ジョンナン}1をはじめ政治、社会的な変化が続いた。1458年、24歳の金時習は僧侶の姿で旅に出た。一生の放浪が始まったのだ。彼は放浪生活の中で多くの詩を残し、小説『金鰲新話』^{ク モシンファ}や2枚の自画像を残した。

金時習が晩年に滞在した扶餘、無量寺^{フ ヨ ムリョンサ}に彼の肖像画が伝えられている。彼の死後、1583年には文集が編纂され、その中に板刻をした肖像画と、自讃²が含まれている。彼の肖像画は多数伝わってくるが本発表では ①無量寺の肖像画、②文集に掲載された板刻画、③日本天理大所蔵の肖像画、④慶州祇林寺^{ギョングジュギリムサ}の肖像画を紹介し、意味を探る。

朝鮮において肖像画は、影幀³の機能を有していた。無量寺にある肖像画も同様に、簡素ながらも優雅な半身像である。日本天理大の絵もほぼ同じ姿であり、慶州祇林寺の肖像画は神仙の姿をしている。一方、自讃が添えられた板刻画では、鋭い印象の金時習の姿をよく表現している。

高い自意識を持つ金時習は一生を両極端の間で迷いながら送った。その一つは、誇りと自嘲のことであった。彼は天才的な面貌、朝鮮前期の政治事件に対処する姿勢(義)、色んな学問に対して開いていた態度(儒、佛、道)のために、その名声は後代まで続いていく。彼の単線的ではない人生は詩と絵に反映され、それらを通して金時習の自意識と後代の人々の視点が見えてくる。

¹ 1453年(端宗1年)、首陽大君が王位を奪うために起こした事件。

² 自身を称える文。

³ 祭祀や葬儀を行うときに、位牌の代わりに使う、人の顔を描いた掛け軸。遺影。